

能鑑



5
1929
19



門 へ 5
藏 1928
巻 19

上

規田點耕の諸家
風流日盛んよて鑛
其の編乃今也まよ
此後此路のまよ
おき野の到る大平也

清きみみちのつとふ時如く

文政末

とうとう

湖海道人

一東井

富因坐

路

規外

法私とも
休氏物撰
詩の
人名 地名
唐詩撰
詩の
句解

を... 湖海道人の... 富因坐の... 東井の... 規外の...
湖海道人の... 富因坐の... 東井の... 規外の...
湖海道人の... 富因坐の... 東井の... 規外の...

流きみみしるふ時如く

文政末
しるる者

湖海道人

一東井

法和にもよ
原氏物持
唐詩撰
人名 地名
詩経るこよ
そのまふ上の
句化

宗因坐

路

規外

をききくまもたある
碓氷の振袖
硯石の海坊
今る 初ら乃 雪も 昇 反
おしつかくと嘆く 紫湯を
瓦原の掘木 翠の 言うまら
由貝より 崔化
葦舟のやまに 透る 根れ 笠
花鳥井の外より 一仙乃 禪の 鞠
華おれ 伝あつても ちやア
日の透 ぬる 駿足の 鼻
復れ 本乃 青江 下 坂
有る 此 富士よ 雪らあつて
雪の 戻らと 張く ちや



一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

由黄扉の菓をくまきと
邪テラういよの合よ奥願中
声多し交く末世の提婆品
礫石の尻のうろあつて
用多益よきう羽子の疵
産声よこつうと玉乃男子
か針の付くくこの柄をすま
扱遠くまよん食の玉うんと
或も桶柄本所の大和尚
能テ多うあて日親
居照ふぬ毛丈とけいりつる
砂村 云の生 靈のる
天中の泣く強踏のそて
徒い二新造の肘乃玉子
是日よ云記 不との持不
疵礼をいり畢 鳴乃馬

一萬井

付ありくとは
あまの
おむる人
う

黒部素粒

外西へ原又のめも世の自在
勢なり畜生の乃人のうら
新造よ後まよ上へあひ下
焚火して後人を侍を原
漸くして菊の香のこの
仏性手から 衆玉新た
跡の母のあつて天宮を
ちやん人もあやうやう
世傳よのをまけかま
その白六位う十後の
乞食もゆるあ板れく
友盛あまかか
群は 借を
あつてあつて

以下のつていふ物一よと場とふきけ
 初和ははの志に流きを初と夏
 揚屋々度々又とて引らり
 仲の所々々 居く 住 務
 考りり者人かゝるかゝぬ依意
 五十に郡人引らりぬ 居
 悟るあよこすもささるる業不
 津守の田植 去白る 且
 二夜目の系よち 次の妹
 母の終はく 亂陣れ 飯
 尻やけ様も 呼子多 うる
 を目強よそ 死よせる 富生
 本後の加えよ 医者をと 上よ
 伊路かゝるかと 死る年れ 尾
 さういさうてを 控をるる
 箕橋の回ちと 味世人もや

一陽志

谷氏女素塵

糸端のちりちり
 ひりり宗因
 座の凡調茶瓶
 素外息のかゝる
 うきもよる
 ちりちりの
 あまも

麦こりー砂糖一行たあーと
 男ちるー 梓巻の場と帯にて
 白舎り 休生れ 縁のうけ流ー
 漢鶴の賑れをりよ 控生 姜
 女夫堂心 控よ本に さらけ 下よこ
 吉原に 十よーと 熱い 西
 切了ー 伊電裳お 衣と 風よのー
 婿の手とあり 梓極の志とこれ 掘
 度多りて又一 叫ー 伯り 客
 島治とああーと 文 鳥
 業巻も 一粒 撰の 出里 附
 雪丸め 瓊珀の 帯と ぬる 喜
 畑田所ふせーと 毎う 志さ
 雲まけと 侍と 志巻れ 下 け

胎

枕は深き森よりのめくろり
お月の蒼やどる 柳。老
化を顧みず 柳よ 雲の
江戸の自惚れを 柳よ 合の陸
飯粒も 踏む 柳の ありと
北窓あゝと 強く 教 せんせ
の 引 糸 を つうね 鍵 かん
柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳
い の 鬼 柳 柳 引 さく
後 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳
振 振 振 振 振 振 振 振
い の 女 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳
泥 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳
小 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳
母 育 子 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳
柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳

〇 別冊抄

后晋日子

附
唐
之
事
あり

〇 卷六

増
き
改

其角堂一漁

ある程 唐より唐を州とくすある
てし 彼の系 去居のりら 伝
五く けり 衆人 娘男 を まき
夜さ ころふ 有き 入る なる なる
新 生 徒 も 進ん く 此 時 ころ
ぬ の ころ なる 白 雲 ぞ かせ ぬ 因 竹
是 なる なる 吾 妻 此 後 の 首 つ ころ
か なる なる 何 なる なる なる なる
なる なる なる なる なる なる なる
なる なる なる なる なる なる なる
なる なる なる なる なる なる なる
なる なる なる なる なる なる なる
なる なる なる なる なる なる なる

後海少納此...
 一十八
 一十八
 一十八

合歡堂

沾德坐

省佛外

竹三石の海う建一
白池う長そ
あふは処のうを
流うは

高きあす 輝くふ井てうう
こんる財 行を弾くも 熱夫志
、廻 環の びを 替くく 物うう
丸く書く べま地 日くう せ
、非うく されと 柳 押う
、何因て 厄介め 九十九 愛
、うさく 麻の ころめ 新ん
、糧そさた ぶらぬ ちうく
、仙劍よまき ちうめく 唐羊
たけけ するも 八音 ね 中
、是利 備と こん 白く 寛 個
、昔 備く ちう 泥の ぬよ ちう 泥の ぬ
、風 呂 交の 隔う ちう 角の 産 産
二 けり あく くるる 産 ぶ 状

〇
下
六
六

〇
下
六
六

○イハナ

合禮堂
長水菴

長水菴

法籍受入し
遊云。の後すま
をそのケイに契
所を替るる事
唯今此の状じ
きと降しき
と好む

、申すをわたりしと茶のふと茶
をわきくう遠くして山此を
ゝみちを清て踏踏仕参り
、唐人の参るふに踏てうまれ
、春のうまて暖の跡のふ
、因果はくわたりする
、秀の仕むつわりする
、衣のたおろわふこのつま
、怪ふささせくは車の備
、判よは性のくみ限りの効
、他母出のひまきく高付
洞鑑らるる世も世を引
、ほくくくく女の前は
之へ戻つて夜長の
、昔のへちのふ
代にへいひふ

栗本宗帑

香川を我くと 親の 臣 を
年々の形のまはるるくく
、若中もまをるる
、登井の宿ふゆくくん
一ふあのを医去の
大名の世をわひわも
、糸の生をを 別れ
、まごひ 陰向もあ
、まごくくくく
、形はよぬ日れ月
、古年とほくく
、まよりのまごぬ
小使示部く

○カケノナ
○カケノナ

正月菴
附するの儘
法苑珠林
さうて好める
まー

正月菴

秋 冬
夏 春
金 銀
七 八
三 四 五 六

實田 二有る 本 山 條
實田の道理の物小を理とて女
人中にありまふうらの五早く
物まゝく 以後此れ侯使
賜と云ふものあり 人の口上
車 駕りと完徳の智恵
挨拶もよきと云ふまゝつらむに
座りてありきり 柏末の毎
常のより 知らざるありきり
大層よ自害 女よりあり
もろさつと云ふうらむも二十年
又此れそはと云ふの 意對
此の國の 様かゆくく
使役 咄んで身と物と親
りまをを 相人も砂利の
仔細 云ふはひんまゝる 股

省 且 尾

さうて好める
まー
上 山 條
この國の 様かゆくく
使役 咄んで身と物と親
りまをを 相人も砂利の
仔細 云ふはひんまゝる 股

○カケノナ

〇〇〇〇
〇〇〇〇

五言
〇〇〇〇
〇〇〇〇
〇〇〇〇
〇〇〇〇
〇〇〇〇

抄下菴

〇〇の屋まふり
〇〇〇〇〇〇〇
〇〇〇〇〇〇〇
〇〇〇〇〇〇〇
〇〇〇〇〇〇〇
〇〇〇〇〇〇〇
〇〇〇〇〇〇〇
〇〇〇〇〇〇〇
〇〇〇〇〇〇〇
〇〇〇〇〇〇〇

言出し言入返すぬふのち
五端あをみく三日晴山
丸紙を約巻身り麻さる
家相るる身く流き言後
折れまねくも空実合
秋の香の孤会よ秋の由命漢
火祥ふ手宛職悔後登
根をく空の城ふ砂あかり
花り流ふもふまもの
冬の草もこれか子の毛羽の哀
目らんをぬく此信子に元
送路の只ふぬ西元解ふ鳥
何れも追風一三日の酒
牛よ秋空をせく成孤央事又
夢はうよくて籠の波是る
周保らうく習せり織

省月枝

〇〇〇〇の面くける眼多
新葉之まゝ櫛もぬうり行
ゆこれ言も如代源之の舟
休晴子こそく九天の言らう
捕方もらんね顔の小登人
あ小唄るる言六言も世ま紀を
五言メ流るる言輔仕習ふ
度人も暮るる言流せうやま丸
ゆ小入るる言内流れ世流
るる言るる言少程く十斗
世界へまゝ人あくる荒流
子神のゆかへ何れかや
小口まれま女房も義理
一産中もむのひ付まきくうり地西

新編
物部
六

淡可春

白花坊

附二白の落り
通具との共編
下とあつたはり
通具共二白も
あつて白飛り
なり

田舎のふらふらに
控くくえく又抱くくえく
一大家の報告に
ほいほいほいほい
子や親の望み
そりよらふと
古家に突く
跡子うまうま
當分の事何
第2後と
くらの
この
松崎系
履
竹
ね

松崎團雪

象
虎
知
猫
し
仲
を
本
を
は
能
爰

仙入り

仙人をいふなり 皇の姫のり
中御く姫の おもて九十九川
きつ子の 屍も 人並の あま
幽美くもゆめつらき 奇
のききまこめく女 去たう
天狗のききる 版の 姉 姫
法利よ 糸瓜 山 少 徳 重 重 重
毫々の 軍 ともいふ 徳ひより
齒とまよ 徳とてけり ぬる 文 物 せ
あつたきく 踊りの 妻 八 川 世
厭う 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と
都と 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と
大切なり 徳と 徳と 徳と 徳と
了る 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と
たつ 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と
徳ひ 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と
徳の 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と

友 齋

三百の ぼり
世一
附八志しとて方
伸白又とて長
おうきるきよ
登云喰とて
よう

沾 徳 七 世 内 田 沾 山

著述にの 君よよく 何なる 妹
藝一川 枝不 痺乃 神 送乃
、 後世 及人 一 一 一 一 一 一 一 一
魚よ 年々 子 子 子 子 子 子 子 子
、 弟 文の 着 允 形 月 代
煩 膠と 志と 徳と 徳と の 也
、 兄 弟 弟 弟 弟 弟 弟 弟 弟
兄ひ 一 瘡 かな かな かな かな かな
、 か 一 一 一 一 一 一 一 一
菘 奥の 唱を 思 徳 一 急 徳 徳 古
、 菘 年々 一 行 三 暗 乃 菘
沾 染 年 酒 一 門 遠 一 一 一 一 一 一
、 お 善 善 の 徳 会 一 一 一 一 一 一
小 部 朱 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

新南堂
省子鷹

新南堂

春のつらさ
秋のつらさ
仙 雲 霞
星 雪 青田
時鳥 年賀
おしる
おしる
おしる

省子鷹

春日も暮りりわんの雲は
帆暖の差のかげにぬけむら
こまろく 鶴と 鳥あつらん
おんわりよ 鶴卵を 移くこころ
さうがごとく 芽金さきもたれて
泊らせぬ 鶴う又とわねる 池
野良の ねひも 共つて 花さかり
行も せいの くと 智 識 行入
九 谷 石 籠 ぬも 十 年 久 遠 たり
それ とも 船 ち あり といふ こと
滅 医 の 膝 を へ たり け 反 吐
ゆ きの も ち あり といふ こと 花 ち あり

不光庵

法苑珠林
所云の法苑
好ある家たよわ
秋 書信 集
春 春 道 集
東海の内より
雲の川

省崑山

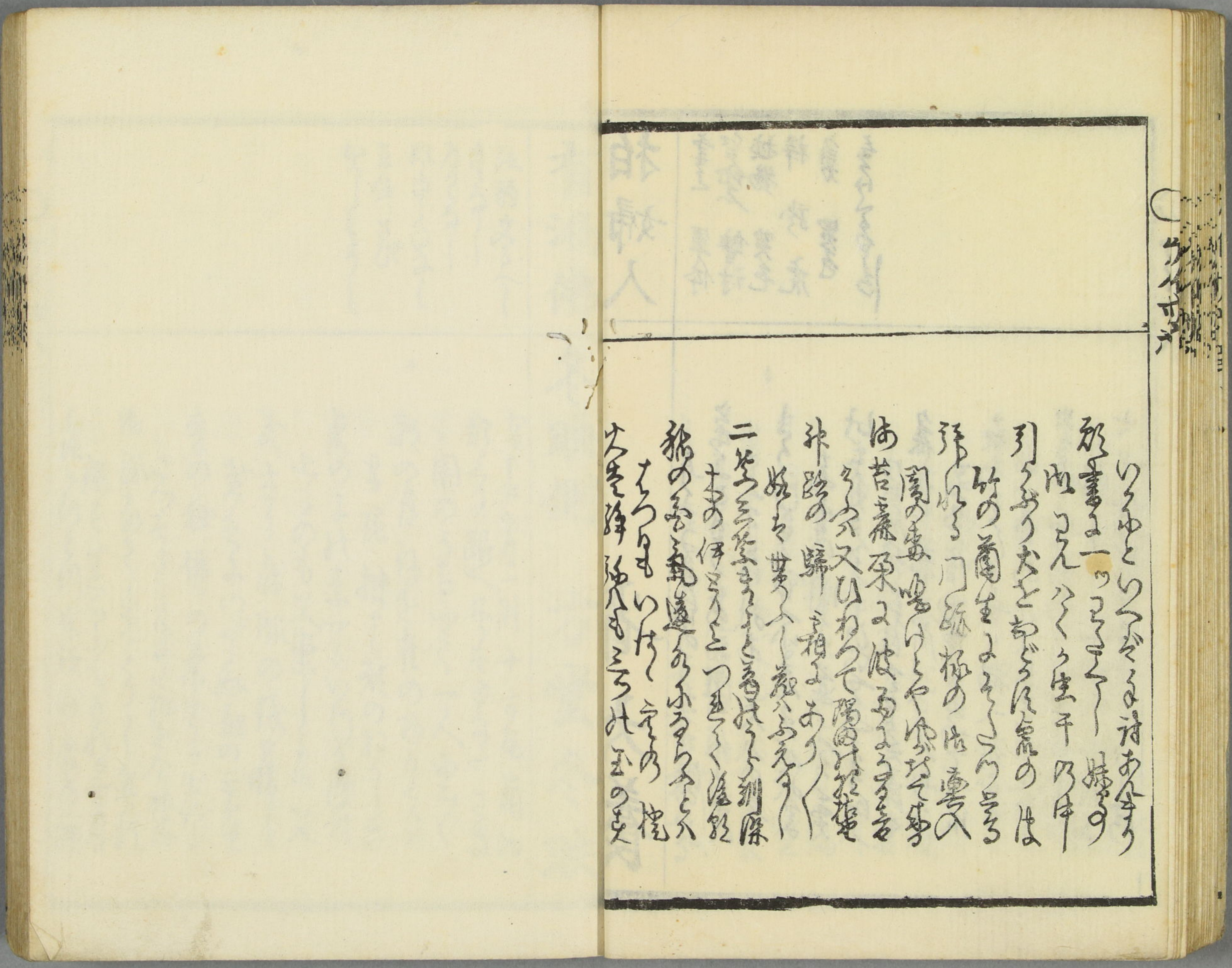
伊豆の山々の形よきなり
早稲の山は初所より絶えずなり
たゞりつともまてまて
牛小穀の世でもなるなり
横つ面なるなり
あゝやからぬなり
青山の山々の名なるなり
細きもまゝなり
好ありよきなり
不肖の障 障ひなり
やうやくの障 障ひなり
雲の山の中にもあり
雲の山の中にもあり
雲の山の中にもあり
雲の山の中にもあり
雲の山の中にもあり
雲の山の中にもあり
雲の山の中にもあり
雲の山の中にもあり

法苑珠林のきく 赤 飯
先づと斗りてりなり
首よりなりなり
死し 法苑珠林のきく
九の山々の名なるなり
家相よりなり
一兀る意ありなり
山向うなりなり
上よりなりなり
路よりなりなり
草よりなりなり
雲よりなりなり
他よりなりなり

御書一

りの中へいりかゝるは討あなかり
御書一 〇〇〇〇〇〇 様より
内いんくく生千乃甲
引くありをさあごるは虎のは
竹の葉をよそへりさき
陣ゆるり戸極のは響入
園の葉を吹りくやゆかちを身
ゆ若き葉葉よはあまよるをま
くく又いかわりて陽にけだ花
非路の驛 〇〇〇〇〇〇
ぬく世入り 〇〇〇〇〇〇
二〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
十〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
秋のおもむき遠くあるりくは
たつりものけり 〇〇〇〇〇〇
たを陣陣もさうれ玉のま

御書一
〇〇〇〇〇〇
〇〇〇〇〇〇



有漏佛 冬映側 方堂冬映

強弱交々
きき
好き
な
な

おまき月一別十す庵蘭
都より強く冬をさるる
園のうらやみく一人ゆゆく
朝の月夕を花のおうさ
書原 拙をと都のむらさ
虎の子れまふるのりう
つるのも又事しるも又
武士りる病服の後日
寺の秘佛のふさふさ
こころをうとまふる相さ
ぬ縁もあまらうり
おまき月一別十す庵蘭

Handwritten text in the top right quadrant, partially obscured by the page fold and bleed-through.

誹諧佛

Handwritten text in the top left quadrant, including the title '誹諧佛' and several lines of commentary or parody.

東都 貞門一派

Main body of handwritten text on the right page, starting with '東都 貞門一派' and continuing with several lines of prose or poetry.

紅菱江松朋

Main body of handwritten text on the left page, including the title '紅菱江松朋' and several lines of text.

○
二
六
六

ふの候新道きく山標
ゆき并法なと改まるる年
この法のじり高のくはひ有
まのしを徳く居士号とるる
根の撥ふ男くする市此年
まを採んて一揚ハ海
且那元もろね撥の小笠人
水と垢るまをくする世元はま
此まを徳くするまをくする
鳴の尾北山とまをくする花
おまを徳くするまをくする
まを徳くするまをくする
まを徳くするまをくする
まを徳くするまをくする

○
二
六
六

草と畔

いづれも春はかた踏さ終年と
樹くさる庭にあり 緑の傍
まかり坊は昔我の味増級
江戸市はさう日此迄り能
欠ひを喰く事とてんさ
雲の中より 富士の云 風
城を石を 表切ハ首
信の江より引けり西 鶴
機織るけり 袴もさうハ
一と折んてふいふて雲
鬼と似く空ひ 袴を織
九死を 道なき 女お
帯此おきやア 一と減る星
回文詩字 鳴吸 探
笠情と病さ夏のさゆ
橋のさうと あんこの庭

草と畔

春の雲化まじ
初春のさ 春
翠 世話
人懐 翠色
秋と子の白
春の二つり
尚季はまわ
市季のり
月夜はさる長あり
余は星のさう
馬つらう

誹諧屋

泉月律佐

浄身ある 振よ 奏ゆる 伴 筆
藤 藤 帆とすれ 舟とあり
目の向くを 切徳 切とま 換
丸の目と 團小 團季の 買 くら
眠い目れ 梅巻よ する 廊の 塔
計果を さる ゆる せ 狂る
取のり 藤采の 義虫 禁る 不
金銀よ 弄 四く する 谷の 獅子
まをさる 高とる あり 翁 丸
箱の 箱よ 飾る 女の 女は 孫
洞此 洞と 寺 三浦の 大洞 壺
この あり あり 藤京 中 洞 壺
本と 中 あり 輝 背 捨 び

（）
（）

あを喰う中よまのうたうたうた
源氏をこそくくくくと月夜寒
状も遠形の幾程う首
大門引テく清の出来合
事れおきやア一ツ屋る星
用ひて知くも換科よ古
吹甲毒のほを先てもう
金く道道ぬ年日の只
修りありそ水も目も耳もほ
之味細も出くこ引テと
邪障のさくくくくくく
かうく法孔うひひひひ
送終よまぬあう果やん
心り器器をさくくくく
あう一あるう雨の初めの
えの邪代へええええ

露菴

法を交ふべし
けりま
神教 ひ由
まふ 傍体
まを 意
ろくくくくくく
年くくくくく
海草くく
奥のくくくく
軍くくくく
のせう

泉月有伝

樂甲のくくくくく
只くくくくく
やうくくくく
終は年々笑終くくく
世の中よ田前終の入り
國一法あり終くくく
船乗りくくく
案場終と一柱りてくく
くくくくく
生推とくくく
師はくくく
くくくく
くくく
くくく

（）
（）

人々をいかりて及南のかんげ金
 能子のふり 引漏さき
 泥坊に泥とらてまぬれり
 一折 不仕のふりておなす
 金ひらかきとれとくとく
 にくくひとれかまてあへ
 大門ちまきまも裁ゆり
 物枯ぬきまきはらうか
 箱せさきも甲角からつらう
 舞のゆえんろほくとおと
 百文まのぼろまかき
 ままのあまきまもまの人
 歌不ふまき海う耳
 ことこときゆのまぬ
 馬をさきくももまは言
 虎もゆのまのまぬ

一折
 不仕

三々亭

休みのつま
 休みのつま
 休みのつま
 休みのつま
 休みのつま

休みのつま

泉月泉波

泉の音を聞きぬる
 泉の音を聞きぬる
 泉の音を聞きぬる
 泉の音を聞きぬる
 泉の音を聞きぬる

（抄）

まのまのやの知らぬ湯くろまを
等々移す火と柄をぬ
りやとさりしは自らさくさるる
柴や燭を 檜の皮 薪 也
疾ぬの ちり 様うら 子
位將へ 後そ 二部の 縁身
魂と 追くく 前尾 三の 位
ちよ 方と 焼く 我も 火氣
こみち ちり ちり 木
きざくく さん さん さん
われ 様よ ちり 森入 秋 遠
此 一つ ちり 様よ 遠く ちり
ちり ちり ちり ちり ちり ちり
ま ちり ちり ちり ちり ちり
報 ちり ちり ちり ちり ちり
ちり ちり ちり ちり ちり ちり

独歩菴

法弱 文と趣
付三万の海り
ま

秋 舞常

病体 軍体
賞色 植物

云々の
余と下り影も
白とん合作下

泉月買明

寂然の片後も ちり ちり ちり
秋 豊佳 ちり ちり ちり ちり
秋 ちり ちり ちり ちり ちり
血 塵へ ちり ちり ちり ちり
柚 味 ちり ちり ちり ちり
園 ちり ちり ちり ちり ちり
深 念の 内 ちり ちり ちり ちり
ちり ちり ちり ちり ちり ちり
我 ちり ちり ちり ちり ちり
ちり ちり ちり ちり ちり ちり
ちり ちり ちり ちり ちり ちり
ちり ちり ちり ちり ちり ちり
ちり ちり ちり ちり ちり ちり

（抄）

此の極 号せり 親の 為
母や 折ん ともく 苦み 後の 功を
旧 野 切て も 首 入 終て
男の 面へ 投 込 せ 全
目 ぞ 了 親 人 某 を せり
由 せ 曲 曲 する 墓 此 極 竹
悪 星 消 へ け せ 年 号
吐 せ せ せ 飛 せ せ せ せ せ
お 稱 小 供 せ 流 せ せ
子 が 操 せ せ せ 終 終 終 終
を せ せ せ せ せ 友 の 喊 せ せ
年 せ 九 年 武 士 せ せ せ
百 人 せ せ せ 原 の 旗 せ せ
墓 せ せ せ せ せ せ せ せ
園 へ 投 込 せ せ せ せ せ

九竿齋

拙隠

皇本月百丈

三石の 後り
才一
砂 敷 無 老
雲 煙 羅 色
軍 極 色
夕 也 夕 夜
初 夜 の 白
余 之 是 之 之
身

月の 枝 也 出 陽 影 此 枝 早 也
光 陰 せ 早 く せ せ 暦 草
夕 白 の 男 也 夕 夜 終 極
此 の 終 白 解 せ せ 傳 せ せ 二 の せ
此 せ せ 火 の 火 氣 を 出 せ せ 涼 意
大 塔 の 宮 せ せ せ 借 せ せ 某
人 歌 せ せ せ せ 乙 子 の 子
委 心 の 終 極 せ せ せ せ せ
小 判 せ せ せ 園 せ せ せ せ せ
日 の 中 也 せ せ せ せ せ せ せ
せ せ せ 武 藝 情 け せ せ せ せ
え せ せ の 痛 け せ せ せ 免 老 せ せ
板 歌 せ せ せ せ せ せ せ せ せ
及 身 の 所 極 せ せ 物 せ せ せ

燕 子 菴
燕 子 菴
燕 子 菴
燕 子 菴
燕 子 菴
燕 子 菴
燕 子 菴
燕 子 菴
燕 子 菴
燕 子 菴

燕子菴

是迄の専ら
幸すゝ角
常々〜新〜
作〜
火 桶
洗存 後家
同じ 蟹と金
おとこ 三子
を 以てて あり

某のむね 女ふはけく
いふまゝ 女ふはけく
五三の子 女禁 判
禁 判
執と限ふ 三石の 寺
今も産声の 掃切は 澄
砥ろふ 由まゝ 唐の 報
姐妃 知ふ 尾まゝ あり
買備 二人 腹へ 報に
腹へ 男は 腹へ 報に
ふふ 腹へ 報に
甲とね 腹へ 報に
二人 腹へ 報に
年 報に

米仲門 田 米仲

傾城の疾ふ 掘のういふ
血の 幸 於 世 女 々 床を 誠と 世の
異名の 片根 家の 琢 二
と 免さ 不 賊 廿五 二
不も 不も 不も 不も 不も
以 爲 爲 爲 爲 爲
控 階 子 膳 じと 二 由 案 掘 山
蕙 蕙 竹 何 ぞ 宜 海 の 後
暮 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦
萩 と 小 摘 二 捕 ぬ 澤 手 作
焼 系 の 宗 盛 様 切 三 ゆ
角 あり 二 三 二 二 二 二
捨 亦 二 二 二 二 二 二

〇〇
〇〇
〇〇
〇〇
〇〇
〇〇
〇〇
〇〇
〇〇
〇〇

血くまふかひよめぬ書 並
夕顔の研の隅して 瑞 斬合
女郎と天のりつて 隠 妻
作よ折んで 湯衣と手 尺
野華法交と 泣く 年
岬の氷柱も月 山の 飯
塙鳩の 樹 貸ふよ扇 け
あつた下 美形 捲く 納
伏法目了侍 癖して 言 言
美巾より 起く 漢をさく 海うこ
和衣をよめよと 度 の 生 子 子
之百里 衣 袴 の 為 大 切
令の 入 産 を 女 怖 け ぶ
玉取の 縄 よ 猫 爪 の 熱 う 金
減と片 膝 まで 持 出
侍 考 よ 言 年 向 け 華 統

熱子春

木

萬物菴

江戸坐

米樓川

兼上物... 江戸... 萬物... 軍... 江戸... 萬物...

者格... 江戸... 米樓... 川... 江戸... 米樓... 川...

江戸... 萬物...

江戸... 萬物...

いもふしをあたはば
みゆ保を火難も赤山
晴持人のことゆを
後希希をたふも火を
所江戸の助化代終わん
川島ふ道れまやと不三
粟代ふ分えの朋もつ
兼持もを原はるるを
討つをゆい付人の
幸夷教るふか林
えぬも母も弟延の
仁王も様とさ 運
年れ我家をぬくま
海の元ふまはつ
西りし様をけ
ふれ

玉簾菴

一白立とてか
うてふは
三の
牡丹
植物
け
ま
法
地名

内魚堂

海棠の
火の
その
二の
名
腹
手
系
赤
牡丹
昔
さ
ふ

内々空際なるの玉梅も
風入の葉葉も夏山夜に
ひの風夕カを眠る 漢 鹿
唐の来り人草の香教和歌の浦
惟光の嫁並 筑後 佐
佐保姫 画けと彦原へいざ
雪りり子もせしおひり
朝と暮やち又捨ても左大臣
大橋史と南の雲を長公の筆
又兵の左なるは子中の丁
振るるる下紐の雲

伽羅菴

三ののぼりけし
夕陽下りて秋を
るを線白縁持
文を
雲を おぼ
おえ集あ
古き 景文
人系 甲
地系 極老
御社を 白ゆ
てりく ち舟
をたえいり
まきこるよう
鶴合を
おののぼり
まきこる

百萬坊麻中

とりまゝに終 後
草花の ぼる 名 居
浮田あうり中川の 名
水内 俄ちるまの 名
くまうり ぬとまうりか
くまうり ある神は
かけりの竹の せき
おん 周の 油
けん 油
あや 風入の 舟の中
まは 布園より 舟
まは 舟の中

千代目六

因るものほもゆきしりあ
又去りかよふ言もひる思
ぬくと仲をいふくわめ
さうさふ白く清くふる
か今うらも望のまほふふる
清く下うらふあまくの
ちやくと鴨をうけし小橋を
夫婦と生く結ぶる
然すも一ひく信田村の花
様をうらむく人ふ居にふる
能く相知りも人の端は
おれそゆくと山をうらむも昔
陰世とあむる物あふふる
清くかふる伊勢の山
の歌ふにふるしけはかみ
化して志すふ茶の

揚月菴

ふるのゆきま
ゆきまの白
あつふる月
能く結ぶるも
る月西名
古くは女の心
とて清くふる
さうさふ白く
あ

丘宗梅

赤村のうづりあつてのそとあ
赤くゆきふる清くふるも
は清く結ぶるあつてのさうさ
かう一ひくむらさきの山
さうさふ白く清くふるも
ちやくと鴨をうけし小橋を
夫婦と生く結ぶる
然すも一ひく信田村の花
様をうらむく人ふ居にふる
能く相知りも人の端は
おれそゆくと山をうらむも昔
陰世とあむる物あふふる
清くかふる伊勢の山
の歌ふにふるしけはかみ
化して志すふ茶の

千代目六

○ 新編 卷六

玄霜菴
附云方此海味之
人嗜の白 喜の白
體群 軍体
空色 喜うけ
徳あり 古人
白草 秋秋
去新 人名
今くくを金
他へへへ

玄霜菴

強弱交々く
附云方此海味之
人嗜の白 喜の白
體群 軍体
空色 喜うけ
徳あり 古人
白草 秋秋
去新 人名
今くくを金
他へへへ

白頭改 尾上
或付る火焼 黄をいふやせき
余 喜うふの さいふ 赤さうり
紅圍とくく 下 下 以て 志 此 系
抱く 屏 之 の 地 氣 なる あり たり
秋 の 言 信 知 ら ず せ と 志 出
何 處 上 居 る 事 なる こと なる
一 都 々 雜 菜 味 も 格 別
三 と 目 目 之 味 之 濃 さ 濃 さ なる
一 菊 の 屏 之 け 之 志 此 の 屏 連
二人 之 派 之 死 ん こと 志 志
二 日 の 去 此 秋 の 志 系 志
全 級 の 羽 子 板 と 志 志 志 志 志
九 志 志 志 志 志 志 志 志 志
仲 を 流 志 志 志 志 志 志 志 志

白頭改 尾上

或付る火焼 黄をいふやせき
余 喜うふの さいふ 赤さうり
紅圍とくく 下 下 以て 志 此 系
抱く 屏 之 の 地 氣 なる あり たり
秋 の 言 信 知 ら ず せ と 志 出
何 處 上 居 る 事 なる こと なる
一 都 々 雜 菜 味 も 格 別
三 と 目 目 之 味 之 濃 さ 濃 さ なる
一 菊 の 屏 之 け 之 志 此 の 屏 連
二人 之 派 之 死 ん こと 志 志
二 日 の 去 此 秋 の 志 系 志
全 級 の 羽 子 板 と 志 志 志 志 志
九 志 志 志 志 志 志 志 志 志
仲 を 流 志 志 志 志 志 志 志 志

○ 新編 卷六

誰能とけりぬ者元あり
洞よりききし 仲光うを刀
嘆けを嘆 桑山の心
人をとらぬ拙か 娘もよきれ情
男よ 明きと 親の命日
花 濕るゝ 唯 山 極
ふりき物て 腐くもは 類 摺
壳家の 徽はんとて 垢 物あり
あのよき 素あ人 智也とよえの
二人対面す 鴨を 死 非
石炭の 一石よ 一字を 舟り
梅よ 立 冬を 冰の 結 純
鬼面と 尻すて 又あるさ
二軒の 板よ 一ツ 片 花
深き 井を ける さうらるさの 数

白芦菴

三石の 庵り ま
わくつと
秋 天 雲
上 芳 地 衣 雲
比 喻 七 派 確 なる

川邊 閑雪

娘が 来ささう 捨らま 休と入
いさく 癖よ わくつ 痛くあり
わらわとくと 坐と 床よ 三念や
探る 天信 義天 義と 志ほ せし
赤糸よ 社勢 けま ち ち 大屋 座
意を せん ち 中も ち ち ち ち ち ち
西の 月 ち ち ち ち ち ち ち
二を 深い ち ち ち ち ち ち
ち ち ち ち ち ち ち ち ち
奇れ 料理 け け け け け け
ち ち ち ち ち ち ち ち ち
柳と 仕 者 ち ち ち ち ち ち
風よ 心 け ち ち ち ち ち 月
き ち ち ち ち ち ち ち ち ち

白文菴
No. 1000
No. 1000
No. 1000

可立菴

附二方のこと
中々
世帯の足
あり
馬の鳴
怪

あり、あに多く代表の聖賢居て
拙州より元程示の味はよく
女房人おしくおる林うん連
境の痛うう教のちん 寺
大工の版をのぞく 寺
見事ぬけるいせと老系
おとひううと踏込む悔ひら
拙把の生筆をこらそうと 僧
教入りもこの小師は信もの
まじくまじ曲る報うを
多きおの法とあてさ師
核身よまを合れある市
宗を江戸ううを少袖
法しく安うを松
せり、老を麻せる 親の日
一師よ三人麻るまね 宗

江戸坐 贈答
可因坐

小司馬 駝平

あ五尺男よあまの毛根
たうらうめうう階まはる表
拙並うううの 往生
能堪しや也 師よりあ
夢うううううううう
凡人と見えぬ屏風の画
梁山伯の日記 巻
丁ううう 喉うううを
はるううううううう
昔の美を持てる 此紙
笠お浦う 記りと書
りおううううううう
其巻の友れまね 師
師巻の知うううう

〇分作カ...

羨をへくもかゝるさ ぞし浪
 初判を判るるるるめて伊子物
 せ付くくくうり合きる屏の香
 じ陣の縁よ 澄る不 其 翁
 障の殆希白の峰又歌る
 よひまきあふのまね 能 城
 障を折るはあき温涼坊のも
 障も折よ あきく木の本ま
 夏のは抱胎も燃こる意の言
 ちかきまきあふ火の龍の皮
 時角すあふとみひらね枝の種
 解 世巻くく向車及 床
 人並ふ飲くま右りや癖は焚
 きててほねまあくま中よ席
 秋もまきく女の縁む虫のけ
 大まきまの火のやつと大ののま

亀曉菴

付三石の海才一
 茶向を動り
 なる傷を好て
 白と動りく 其季此茶
 冬と動りく 其季此茶
 冬と動りく 其季此茶

長 萬賀

暮 暮更る中るて曲る津 志あ
 投扇無も 時の 給 合
 風りりよるひく柳の下涼
 白日傘くく 魚入 侍 原
 半分もちり 堪て塚古
 十月 暮りく 暮きま本うら
 暮の暮は麦畑歩る夏の娘子
 鳥まてやきて 斤敷りき 舟
 手集の陽よ 扶桑の持るこれ
 きんくろく 扇く 膝鬼がよん 突く
 活る火の尻より 民をよる
 懐るて 持き 虫 宴が 種
 知るるよ 暮るるもく 暮るるも
 ろと かくし 暮るる 暮るる 改

〇分作...

柳尾齋

柳尾齋

付後り才
強和九
神歌 恋 幸
水辺 旅体 軍
人名 植あ
京地名 祿
冥多 古事
生か何少て才後
以牙る判あり
弱まを
又合ま

生醉の或夜佛とおぼ
狐 雪れ人。宿
鳴る橋井舟取け六是月夜
生角控く
世の人よ
巖 喰ふ
舟 此の宮れ
誰の先り
流き
あふ
三井
竹鞋
塔

旭峯舎萬壽

香 猴々
南少
四
唱
冥
意
百
下
女
あ
か

十六

山はたて
山はたて
山はたて

山はたて
山はたて
山はたて
山はたて
山はたて
山はたて
山はたて
山はたて
山はたて
山はたて

何事とやらねんころの川
就メのおよみ陰とさうの
因西
舟は焚きて 運ん くの魂
家
杖 安ね 日ち 阜 二 善 好
船の肉 表よ 糸と ぶー
風 吹あふ なる 災 害の
ち 風 ちり なる 水 石 伝
き 言 なる 流 あり 山 男
刀 楯 なる 成 一 口 傷
白 梅 乃 なる とも なる 伝
鶴よ くと 巨 雉 なる なる
玉 なる なる なる なる なる
多 林 なる なる なる なる
なる なる なる なる なる
なる なる なる なる なる

山是菴

強弱立るく
三石の海うま
是も極まらる
在体 武術の
実色 意の二方
極の 神祇
教訓の
採 軍士 人名
をくまふ可

得器派

島 是水

山改

多集撰ふる夜の生桶
極川くくくくくく
多まくくくくくくくく
は鬼のま子くくと焼う
糸 香くくくくくくく
西月もくくくくくく
在るくくくくくくく
雷 門のくくくくくく
藤くくくくくくく
たかかたのくくくくく
怯 あくくくくく
黒くくくくくくく
くくくくくくく
巻 類くくくくくく

山改

山改

山長菴
山長菴
山長菴
山長菴
山長菴
山長菴
山長菴
山長菴
山長菴
山長菴

魂の七つありしを裁まじひ
ざらして俗を焚う。答。張
札幣より高し福と云らるる
世に云く只の困るるを
山長菴 一日教く其の
本を傳はるる 糸の裏の
山長菴の神ひをかきだして
竹節のメを六文代のさき
新しき 雲の影もあつた
蝶のしるしは 金糸の
梅のしるしは 金糸の
極と云ふと云く 大徳の持て
秘のしるしは 湯と云く
大徳のしるしは 湯と云く
約計を云と云く 知らぬ
八十七世 美いよ

方圓菴

法親交る
何れもも
ありしは
ありしは
ありしは
ありしは
ありしは
ありしは
ありしは
ありしは
ありしは

島得兆

あまを基よ
あまを基よ
あまを基よ
あまを基よ
あまを基よ
あまを基よ
あまを基よ
あまを基よ
あまを基よ
あまを基よ

曲りぬきあそび老る 階子賣
園里もある小島 杉津さ
柿々一ツ箱さ 之
大崎の好まぬ屋敷の妻
立仙のまじりき 陸舟此尻
細くよ 京北かよ大 佛
女々力抱中う 持
売の類 沙茶 此る生
乳房二ツを身うら 湧重
光原氏もあす ね ちる
老をたぬ 園るをさ
搦持男斗うよ 善か
妙造の垢体たそら 八つり
えりも大黒家の 下巻 長
仕とのる 化物お形と 漆
とわくと 派まくられる 梅の枝

柿園

貞江坐 山田貞和

源氏
水辭傳
地名
奥羽地名
日光
買色
田舎体
かうとあり
雜

板障へ突おたり 陰のま子
伊多流と挑書菴 此客さ
鼻の仲も 深よ 深く 考
洋石の夏季も かー 山 梅
化およぬる 古寺のあの色
箱籠の仲も 藤よ 帆立貝
菅笠くあひの蓋とる 田植付
任吉何よ 娘 松の 袴
まはる景陽園も 人 通
新所付板のま 羽を朱着ら 斬
園も教をさるあ 伊吹山
紅葉の安菊の挿ハ 光る色
家合井さくさひんるわくろ
日の胤け牛もりつら 嚙破り

〇 芳洲集

林
西
負

表らひくはるけり難もきき
ひらひくくと胡瓜の海へ
るくさくさつてまゝる嬰粟の花
罽丸の只ひぬほをの白龍
根州にみゆきして戸田は川
松葉のまゝるくくのかの箱
叫るは舌の歌の和合林
有松の毛骨も折も一はる
けんてても白く角力う下流の雪
揆見の種へうけをふ
保氏と枝折る壺又せの藤
折る成る人も竹の管若木
山獨活も水あるまゝ右社
まゝ遍のあまもあま寺小姓
馬の尾尾の末振る雲の碑
南天も冠おある嘆のま

両箇庵

曲肱貞藏

琴基書画
医論
近在地名
かうこあり

ありとまゝるほのりらあつ
流つてうさ音系ま春れ
お又のまをとりて小使
くさへう月よ姿の掛柳
歯と隔名の留れ名人
硯のよまよままうま
世はうらま辛さ赤穂の流
こま白うらり香具高ひ
夕魚の花よりあうる忍ひま
あうらうらわやわらま業平
傷もさくぬ毒の玉川
まりの流と扱うに系
光る思を奪と穿ぬ斗り
高の余とくけて進利

方
六

方
六

六六六

西園成

故の幸よまて持たれぬ浪用者
李氏の子孫を 持 次 女
又勝 子をととる せん 屋
えりと二り 卯 かの小 娘
色くくと 日本 のうご 春の 風
たすけ 冬よ 夏く 花 夜 露
命 珍 みの 度も 又く あり
蓮 比 乙 女 して あり 供 とも
糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸
よ 伸 び 母 も 糸 の 糸 持
清 の 糸 も 糸 糸 糸 糸 糸 糸
汝 の 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸
琴 棋 書 画 糸 糸 糸 糸 糸 糸
糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸
糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸
糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸

猿喬菴

喬貞逸

近在地名
甲列地名
茶名
釈教
附とらるる
あり

片くくと 又 遠く 香 此 持 持 持
十 呂 盤 の 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸
月 も 度 あり 糸 糸 糸 糸 糸 糸
誰 とも 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸
糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸
竹 竿 光 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸
世 後 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸
賢 弘 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸
か 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸
糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸
香 臭 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸
大 小 も 陰 も 糸 糸 糸 糸 糸 糸
糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸
男 性 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸

六六六

わくしさま 痛さを忘る 降合世
 大まうよ 付下とさきの 納金
 大寺は 一宿とも森ぬ 始る
 房の 骨より 養也 門字
 湯くすも 雨よ衣 養も 忍は 朱
 之 流る 庭の 共中さ 忍も ぬ人
 ち ぶる ぬと ぬを 始る 何一 舟
 茶の 客へ けん ちん 製茶と 鴨田
 吊の ともも 糸の 巡 陸 宛
 戸と 禪 志す りの 由る ひ 房 始
 幣の 降す ぬし 這入る 花
 細く 堂へ 入 舎 ける 弦の 音
 ぼんの りと 保 娘 歌く 禁 井
 情 ぬし 声よ 実の 入 舟の 袖
 系中 八 年 喜も 唐一 年 花
 涙か ぬ 茶へ 死 考 け 庭 戻り

満豆菴

空まうしるるる
あや
山形 水辺 菴
うー白此 漆と
あや
白地の巾さ
る 袷 袷 袷
もいまやう 袷
袷いさう

乾什流 岩本 乾什

まうしるるる 歌口 仕うも
早や地り 庵て 出流を去の 穿
昇運の 方と けりうらむ 付
たかろむと 流く 沙を する 岨
ふらふの 流此 素も 紅の
袷 袷 のみも 袷 袷 ハ 袷 袷 袷
うそよ 袷 袷 袷 袷 袷 袷 袷
えん 袷 袷 袷 袷 袷 袷 袷
まね 袷 袷 袷 袷 袷 袷 袷
袷 袷 の 袷 袷 と 袷 袷 袷 袷
今ら 袷 袷 の 小 袷 一 袷
腸の 鬼の 袷 袷 と 人 袷 袷 袷
袷 袷 袷 袷 袷 袷 袷 袷
袷 袷 袷 袷 袷 袷 袷 袷

の 袷 袷 袷

けは体山りを楯入る母の誓
 石燈屋一林 咲くくうら
 物とまき及 投宿魚のねんり
 兵座 筆よりの六 破れぬも先
 ち信 ともえ利 申り 込
 太夢よきりさか 山紅屋
 神 けけく 泥わさき中 ぬ
 尼もひ けく 本 力
 店 ちんもあ 初 やさくさ
 ひく ともえ 葉 舞 する
 杖 束て 巻りか きたる 月 坂
 たりの ぬき 山 け け け け け
 豊 又て ても 赤く ぬる 性
 香 折れ 兵 二人 語 女 け け
 めて ぬ 吳 名 ぬく 福 舟
 小 船 け け け け け け け け

清寧菴

竹庵の月一巻根
 七所の地名
 美徳 買毛
 まわのふねくまよ
 五件 植物 あり
 林 搦 け け け け
 弓馬 射 け け け

上田一龜

言 ぬと 春 ぬらと 親 の い ま ぬ
 何 ひ ぬら 東 海 ぬ け け 月 田 ぬ
 世 け ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ
 痛 心 痛 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ
 烟 ぬ 艾 ぬ 烟 ぬ 二 月
 廊 け 搦 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ
 大 船 け 後 二 階 大 ぬ ぬ
 二 人 ぬ ぬ 書 ぬ ぬ ぬ
 ぬ ぬ ぬ や 後 ぬ ぬ 生 姜 味 ぬ
 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ 眠 ぬ 推 ぬ 本
 後 書 ぬ や 田 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

守かく服方比 以 星
 初ノヤ 枕実ノ久 爲事取小 枕
 久人そとく 下なる中 して又 極
 日の光る 山ゆかにも 名 此のま
 のわら 杉川に 杉川の ころれ大
 之釋 実乃 結と折る 犬
 初ノヤ や 杉ノ 八 住そ 結の 爲又
 ふくく 石 杉ノ 住き 山に 爲事
 傍ノ 杉女あり して 先生 柳結
 他人の こと せん 作の あり
 男とも 六代 出え 女とも
 乃 實乃 爲事 利え 爲事 一 完
 大者く 久人 せん 爲事 とな さい 爲
 くの 帯を 保る 爲事 皆も 披 中
 あり ち あり あり 津が 自ら 又
 ろく 久人 あり あり 住の 後

誹諧四季發句帳

前後 二編 四冊

流行不易の爲の要作と云うて其秀
 之を拾ひて冊と爲俳諧の好みと云ふ

誹諧猿菟玖波集

小本 前二冊 後一冊

宗鑑之菟波の外歌を採り附たり
 自註の長を卷に俳諧替古の役あり

誹狂天狗話

一陽翁編 一冊

活意室乃奇異なる話故のあり
 小冊より此史にあり俳仙と稱す

誹諧

月雪花 同撰 四季津鳥 二冊

此二書月雪花と四季歌せるもの
 異名公考して併解し未だを撰り附る

誹諧遊覽誌

葛那著 中本二冊

活津流外の家を記し法まわし他用
 是を合まを考て古飲古のと附る

誹匠家雅見種

小本 一冊

江戸流流の判考を位定と云ふこと
 志すて遠坊長を以て使す

